
人生の長さと重さ

半導体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の長さと重さ

【Nコード】

N0927F

【作者名】

半導体

【あらすじ】

あちこちを飛び回っていたセミたちが、気がつく足元に転がって息絶えている。可哀想とは思わないが、こいつらはセミで生まれてきて本当に幸せだったのか、と疑問に思ってしまう。

（前書き）

勢いに任せて書いてしまったので個人的にはあまり好きな話ではありません。

気が向いた方は、どうぞ目を通してやってください。

夏の終わり。夏休みが終わってもなお騒ぎ続けたセミたちが一斉に姿を消した。鼓膜を突き破らんとするかのような鳴き声もピタリとやみ、世界は静けさを取り戻していた。

敬老の日なので今日は学校がない。かといって何か予定があるわけでもなく、俺の足は家を出てから行き先をまるで定められていない。悲しいかな、俺とはそういう人間なのだ。

人生という貴重な時間を無駄にしている…そんな気がしていた。俺はこんな事をこれからもずっと繰り返しながら成人し、働き、老いさらばえて死んでいく。この大雑把な人生の縮図の大半は、今みたいな無駄な時間で占められていることだろう。

俺は、別にそれをどうとも思わない。俺の時間なのだ、有効に使うのが無駄に使うのが誰に文句を言われる筋合いもない。俺はこの生き方が楽しいのだから、問題は無いように思う。

足元のセミの死骸。歩いていると、思わず蹴とばしてしまった。紙屑のような音を出しながら転がっていく。

羽根も体もきちんと揃っているが、六本の足はきれいにたたまれていて動く気配がない。

こいつの死因は寿命だったのだろう。それは避けられない死というものだ。

セミとは、七年もの間を土の中で過ごし、たった一週間の間だけ地上に出て子孫繁栄に臨む。

たった一週間の地上と、七年間の地下生活。セミにとって、その一生はどれだけ意義があるのかは分からない。

セミの一生は、俺ら人間よりもずっと短い。十七年生きている俺だつてまだ人生の意義など見つけていないのに、こいつらは俺より遅く生まれて早く死んだ。

その僅かな一生の間に意義を見つけするなど、あまりにも無理難題に思えた。

セミにだって、もつと人生を楽しむものにする権利はあるはずだ。たったそれだけの間しか与えられないのは不公平ではないのか。

誰にともつかない不平不満が、道端でたたずむ俺の中で交錯していた。

「なにしてるの？」

俺に声をかけてきたのは、まだ喝舌もしっかりしていない女の子

の声だった。

淡い緑のシャツとスカート、そしてカチューシャ。短くまとめた髪形と言い、どこにでもいそうな女の子だ。十歳に満たないくらいだろうか。

「別に…何かをしてたわけじゃない」

俺は子供が苦手だ。その疑うことを知らないような眼が、近づくことすらためらわせるのだ。対応はいつもこんな風にそっけなくなってしまう。

「そのセミさんのこと考えてたんだ」

女の子は何の迷いもなく俺とスキンシップを図ってくる。セミにさんづけしている時点で俺の苦手なタイプに決定なのだが。

まあ、相手をしてやるべきだろう。苦手とはいえ、逃げるのはよくない。

「…セミってさ、人間よりずっと早く死んじゃうんだよな」

こんな子供に、俺は何を言おうとしてるんだか…。

「セミだって生きてる。俺らと同じ幸せを掴む権利はあるはずだ。いつかは死んでしまうと言えばそうだが、それは人間にも言えることだ。なのに、セミにはまるでそのための時間がない」

女の子は何も言っていない。俺の話が難しくて分からないのか？

分からなくてもいい、最後まで聞いてくれ。俺の中で考えを整理したいんだ、とりあえず言い切るまでは付き合ってくれ。

「セミは、その短い一生のせいで本当に幸せな生き方が出来ないんじゃないかって思ってた、つい哀愁に浸ってしまった」

確実に伝わっていない。やはり女の子は、理解に困ったような顔をしている。

「お兄ちゃん、なんか勘違いしてるね」

……

勘違い、だと？

「勘違いはしていない。第一、疑問符で終わっている意見に勘違いとかあるのか？」

「お兄ちゃん、人生が短いと幸せを見つけれないって思ってる。それが勘違い」

なんだ？俺はこの子の言っていることが理解できない。いや、こんな小さな子がこんな事を言う意味が分からない。

人生が短いと幸せを見つけれない、それは間違いないだろう。

幸せってのはそうそう早くに見つかるものじゃないだろうし、俺もまだ見つけていない。幸せを見つかるってのは、それだけ時間のかかることなのだろう。そうでないと、幸せってもののありがたみがなくなってしまう。

「あくまで俺の持論だがな、生物ってのは自分の幸せを見つけるために生まれてきていると思うっているんだ。自分の寿命ぎりぎりまで生きて、ようやく幸せってものが目の前に現れる。そのくらい幸せってのは見つけにくいものなんじゃないのかって考えだ」

「ふーん。まあ、そんな気もするけど」

「で、短い間に幸せを見つけてしまったらそれから先はどうなる？ あつさりと見つけてしまったその幸せは本当にありがたいと思えるのか？それなら、もっと苦しんだり悩んだりしながら幸せってのは見つけるべきなんだと思うぞ」

子供相手の演説。いやいや、変じゃないぞ。変じゃないってば。

「なるほどね、それも一理あるよ」

女の子が俺に拍手を送ってきた。本心なのだろうが、嫌味みたいに見えるのは何故だ？

「でもね、その短い長いっていうのは、私は生き物によって違うと思う」

なんだか、急にこの子の表情が暗くなった気がする。何も悪いこととは言っていないはずなんだがな。でもまあ子供ってのは良く分からないことで泣いたりするし、なんか気に入らないことでもあったんだろう。だから子供が嫌いなんだが。

「例えばセミさんにしてみれば、大人でいられるそのたった一週間の人がの一生分くらいの重みがあるかもしれない。一週間を人が見た

「短いつて思うかもしれないけど、セミさんにしてみれば十分に長いんじゃないかなって私は思う」

「一週間で、人の一生…？」

「セミさんは、きっと人が一生かかって見つけるくらいの幸せを一週間で見つけるんだと思う。勿論みんな見つかるわけじゃないんだろうけど…一週間で見つけれられるから一週間しか地上にいない。理になってるかな？」

…あー、うん。こいつ、子供じゃないな、絶対。

難しい。こんな子供の話すことじゃないだろ。

——でも、なんでだろう。

この子と話してるのは、なんだか楽しい。

「…ああ、俺も納得できるな。だがそうすると、人はセミよりも幸せを見つけれない存在なのか？人より寿命の短い生物は、人より幸せを見つけるのがうまいってことになるのか？」

「…うーん、ちょっと違う気がする。きっと神様は、どの生き物も一生かかるくらいで幸せを見つけれられるようにしてくれたんだよ。セミさんの幸せは大人になって一週間で。人の幸せは…七十年くらい？で見つかる。だから、他の生き物の幸せを比較するのは意味のないことなんじゃないかな。同じくらいの幸せを感じても、その幸せは全く違うものだと思うから」

「…そうか」

何も言う気がしない。俺は呆れているのか、それとも・・・？

「じゃあ俺は何なのかな。毎日をアホみたいに無駄に過ごして、ホントに幸せなんて見つけれられるのか？」

人に言うべきことではないかもしれない。でも、この子には何でも言える気がする。

「…大丈夫だよ。自分は無駄だと思ってる時間も、きっと幸せに向かう大切な一時なんだよ」

うーん、変なフォロー。

「確かに人から見たら、一週間は短いよね。けどセミさんにとっては、それは幸せを見つけるには十分な時間なんだと思う。だからね、お兄ちゃんも心配しなくていいよ」

気がつくとき、そこにはやはり小さな女の子が一人いるだけだった。

俺と話をしてくれたあの人の姿はそこにはなかった。

「…今まで俺と話してたのって、君だよな？」

「うん、そっだよ？なんで？」

なんで？つて…君が別人格が如き口調で話し出すからでしょうが。なんかまるで、人生を謳歌し終わった年配の方の話のような。…声は子供だったけど。

「…あのセミも」

先ほど蹴とばしてしまったセミを見た。まだ地面に転がって腹を上に向けている。

「幸せを見つけられたのかなあ」

「見つけたよ。…きっと」

女の子の笑顔がまぶしい。この子がそう言うのならそうなのだろう。

「意外と、土の中にいる間に幸せ見つけてたりして」

「ふふ、かもね」

面白い子だな。今まで見てきた子供とは違うよ、この子。

そのセミに近寄ると、そいつの容姿がよく確認できた。

この羽根、この色は、ミンミンゼミか。

蹴っ飛ばしちまったし、なんか悪いような気がするなあ。

俺は、足元のセミの死骸を拾い上げた。軽く、持っている感触が無い。

道の脇に土の部分があつたので、そこに置いてそつと土をかぶせてやった。

なんでこんなことをしたのか、それは分からない。

ただ、このセミが可哀想に思えたのかもしれない。

幸せを見つけていたとしても、そうでなかったとしても。

道端に転がって蹴とばされるのを望んでいる筈はない。

蹴ってしまったお詫びのつもりなのかもしれない。

「何してるの？」

…なんだ、まだいたのか。

「こいつさ、このままいたらまた蹴つ飛ばされるだろ？だからまあ、人の驕りかもしれないけどな、埋葬くらいしてやれば安らかに眠れるかと思って」

「…」

何も言ってこない。意外だ、絶対なんか言うと思ったのに。

「ありがとう」

「え？」

妙な言葉に振りむいて見たのは、俺に背を向けて立っているその子。

何故ありがとうなのか聞こうとしたのだが、何か声をかける間もなく――

まるでセミが飛び立つかのように、その姿が消えた。

セミの鳴き声が、どこからか聞こえてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927f/>

人生の長さと重さ

2010年11月14日09時25分発行